とある木箱の有効利用（バリディティ）

neneco

魔法の森
――アリス・マーガトロイド

「あら？　どうしたのかしら、あなた。こんな所で」

「用事がないなら、帰った方がいいわ。ここは魔法の森。普通の人間が立ち入っていい場所じゃないもの」

「見た目で判断するのはよくないわね。私はこう見えても妖怪。魔法使いよ」

「見たいといっても……あなたはもう、私の魔法を見ているわよ？私の周りにいるこの子たちは、魔法で動いているの」

「ふふっ、ありがとう。でも、安易に魔法を見たがるのは良くないわ。白と黒の悪い魔法使いだったら、魔法を見た瞬間に、あなたは消し飛んでいるかもしれないわよ？」

「あら、怖くなったかしら？　それならお帰りなさいな。妖怪に食べられる前にね」

「あ、ちょっと待って。せっかくだから、これをあげる」

「さあ、なにかしら。きっと、外の世界の道具よ。魔法の道具じゃなさそうだし、特別な力はなさそう。取っ手を回しても、なにも起きなかったもの。香霖堂（こうりんどう）さんに持っていくつもりだったけれど、あなたにあげるわ」

「気にしないで。どうせ拾いものだもの。そうね……もしかすると河童（かっぱ）なら、どういう物なのか判るかもしれないわ。でも、妖怪の山はここ以上に危険な場所だから、行かない方がいいでしょうね」

「お礼はいいから、早くお帰りなさい。寄り道しないのよ？」

妖怪の山
―― 河城にとり

「やあ、待たせたね。どうだい？　キュウリ味のお菓子はできた？」

「そうかなぁ。きっと旨いと思うんだけど。もうちょっと、がんばってみてよ」

「頼んだよ。それじゃあ、これは注文のお代。悪いね、いつも届けてもらって。ほんとは店の方に行きたいんだけどさ」

「外の世界の道具？　うん、もちろんわかるよ。簡単なものならね」

「へぇ、この箱が。ふむ……」

「なるほど、いい作りだよ。外の世界は、なんでも電気化するものだと思っていたけど、こういう物もあるんだねぇ」

「もちろん直せるよ。そもそも、これは壊れちゃいない。少しばかり傷んでいるけど、手入れをすれば問題なしさ。ちょっと時間をもらえるかい？」

「うん……中の方はしっかりしてる。……っと、たぶんこうすれば……外れる、はず……ああ、これはいいな。使い込まれているけど、刃がまったく欠けてない。これなら、外箱をなんとかすれば……」

「さあ、これでどうだ！　新品同様ってわけにはいかないけど、なかなかのものじゃないかな？」

「ふっふっふ。私にかかれば、このくらい朝飯前さ」

「使い方？　簡単だよ。まず、この上のカップに――」

「ああ、お代はいらないよ。ちょっと手入れしただけだからね。いつも届けてもらってるお礼だよ」

「ふむ……じゃあ、こうしよう。今度、それをどういう風に使ったか、教えてくれないかな？　自分が関わった道具がどう使われるかっていうのは、やっぱり気になるもんだからさ」

人間の里

―― 博麗霊夢・東風谷早苗

異変はなく妖怪もおらず、平和で穏やかな昼下がり。
鬼ごっこをするかのように、里を走る人影が二つ。
赤い服を着た博麗の巫女と、青い服を着た八坂の巫女。
「早苗ー！　のんびりしてないで、早く来なさいよ！」
「霊夢さんは急ぎすぎなんですよ！　そんなに慌てなくても、お店は逃げたりしないんですから……」
向かっているのは、このごろ里で評判の甘味屋。
「でも、そんなにおいしいのですか？　そのお店」
「前からもおいしかったんだけどね、きな粉餅がすっごくおいしくなったって聞いたのよ」
話をしているうちに到着。今日は、並ぶ人はない。
「運がいいわね。すぐに座れそうよ」
「並ぶくらいにお客さんが来るのですか？」
「多い時は、結構待たされるみたいよ。こんにちはー」
言いながら、二人で暖簾をくぐる。
明かりを抑え気味にした店内。涼しいが寒くはない温度。くつろぐにはちょうどいい、落ち着いた空間。
「あら、巫女さまに、お山の東風谷さま。いらっしゃいませー」
机の上を拭いていた少女が、駆け寄ってきて二人を案内する。髪をストレートにしているのは、この店の双子姉妹の姉。
「評判のきな粉餅を食べに来たわ」
霊夢は席に着くなり、早苗の希望を聞かずに二人分の注文。
「東風谷さまも、それで……？」
「ええ、そのつもりでしたし」
霊夢の強引さに慣れつつある早苗は、苦笑混じり。
「かしこまりました。では、少しお時間いただきますね」
伝票に注文を控えて、少女は店の奥へ向かった。

しばらくして、テーブルの上に小皿が二つ。小瓶が一つ。
「お待たせしました。お好みで黒蜜をお使いください」
焼いて湯通しした丸餅に、たっぷりのきな粉。
「へぇ、すっごくいい香りじゃない」
「本当に。大地と太陽の恵みを凝縮した大豆を丁寧に煎って引き出された、混じりっけのない豊かな香りが食欲をそそります」
「……早苗って、難しいこというのね」
「あ、その、外の世界では、こういう言い方が流行っていたもので」
「そう、なの？　でも……うん、確かにこのきな粉餅はおいしいわ。香りもだけど、きな粉の味が濃厚で。何か特別なきな粉なの？」
口の周りについたきな粉をそのままに、霊夢が尋ねる。
「特別、といいますか、そのきな粉はお出しする直前に、挽いているんです」
店の少女は、喜んでもらえたことを嬉しがるように答えた。
「直前に？　少しずつ挽くのは大変ではありませんか？」
早苗は、霊夢の口の周りを拭きながら。
「ちょっと、自分で拭けるって」
「でも、気づいていないようでしたから」
文句を言いながらも振り払わない霊夢。文句を言われても拭くの

をやめない早苗。どこか姉妹のような二人。
「……なに笑ってんのよ」
「あ、いえ、えっと、きな粉を挽くのはですね、妹が外の世界の道具を貰ってきまして、それで」
思わず口元に浮かんだ笑みをごまかしながら、店の少女は答える。
「外の道具？」
「これだよ、巫女ねえちゃん」
横から声。いつからそこにいたのか、店の服を着たもう一人の少女。顔立ちはほとんど変わらないが、髪を後ろで結んでいる、双子姉妹の妹。その手には、ハンドルの付いた木箱を抱えている。
「もう、あなたはまた、巫女さまをそんな風に呼んで……」
「いいじゃない。呼び方を急に変える方が変だよ」
「気にしてないわ。それで、その箱はなに？」
「えっと、卓上用の、小型挽き臼（うす）……？」
首を傾げながらいうところを見ると、詳しくは知らないようだ。
しかし、外の世界から来た早苗は、これが何か知っていた。自分で使ったことはないが、見たことならある。
「コーヒーミル、ですね」
「早苗は知ってるの？」
「ええ。コーヒーを淹（い）れるときに使うものですよ。焙煎（ばいせん）したコーヒー豆をこれに入れて、粉にするんです」
「こーひー？」
霊夢が知らない単語。
「ご存じありませんか？」
「知らないわ」
双子姉妹に目を向ける。二人とも首をかしげていた。
言われてみれば、早苗は幻想郷に来てからコーヒーを見ていない。コーヒー豆は暖かい地域の作物。きっと、幻想郷では育たないのだろう。外の世界から手に入れることができる者も限られる。
「えっとですね……」
早苗は、少し考えて、
「コーヒー用の豆を炒って、その道具で粉にして、お湯を通して作る……そうですね、お茶のようなものです」
乱暴な説明をした。
「豆を使ったお茶、ねぇ」
「ええ、そうです」
しかも言い切った。
「じゃあ、これできな粉を作るのは、間違った使い方？」
双子の妹は困ったような顔。お茶の道具ということなら、それできな粉を作るのは、ちょっと気が引ける。
「確かに、本来の使い方ではありませんが……」
つられて早苗も困り顔。使わないよりは、使った方がいいと思う。
でも、コーヒーミルできな粉を作るのは、似つかわしくない。
だが〝本来の使い方〟を知らない霊夢は、そんなことを気にしたりはしなかった。
「いいじゃない。もともと、炒った豆を粉にする道具なんでしょ？」
きな粉餅の残ったひと欠けにたっぷりと黒蜜をかけて、口のなかに放り込む。
「こんなにおいしいものが作れるんだもの。間違ってるわけがないわ。それに道具をどう使うかなんて、使うひとが決めるものよ」

そして、残ったきな粉をかきこむような行儀の悪いことをする。
「またそんな、口の周りにきな粉を付けて……」
「もう、自分で拭けるって。それより、このきな粉を使ったもの、他にないの？　せっかくだから、もっと食べたいわね」
差し出す小皿２つ。〝卓上用の小型挽き臼（コーヒーミル）〟を使えということ。
「あ、うん！　まだメニューに載せてない新作があるの。すぐ作ってくるね！」
双子の妹はコーヒーミルを抱え、喜び勇んで厨房に駆けていった。

「ところで……新作、どっちが考えたもの？」
「それが、妹の方なんです」
「そう……。ねえ早苗、ミラクルフルーツって、食べたものが何でもおいしくなったりとかしない？」
「……どういうことですか？」
「別に」
「えっと……どういうことですか？」
「濃い目のお茶、用意しておきますね……」